

バングラデシュの清掃労働者地区の 社会階層的位 置

野口道彦*

1. はじめに

清掃労働は、ヒンズー社会では強く忌避されている。一方、イスラムの教義には清掃労働を不浄視する観念はない。しかし、植民地時代に西ベンガルと社会的にも文化的にも一体であったバングラデシュは、ヒンズー文化の影響を強く受けている。また清掃労働の担い手が植民地時代にインドから移住させられた清掃人カーストであることもあって、清掃労働への強い忌避感情がもたれてきた。だが、このような清掃労働への差別も、近年大きく変わろうとしている。その変化の要因は何であるのか。

この小論では、Bandel Sweeper Colony (以下BSCと略称) がバングラデシュの階層構造のなかで、どのように位置づけられるのかを検討し、あわせて変容過程にある清掃労働の実態を明らかにしたい。

私たちは、BSCへは1998年12月に第1次の調査を行った。その結果は、「バングラデシュにおける清掃人カーストと差別」(『同和問題研究』第21号, 1999年) に報告した¹⁾。さらに第2次調査として2000年2月に関係者へのインタビューを行った。それを踏まえて第3次調査として、2000年4月から5月にかけて全世帯を対象に調査票による面接調査を行った。この調査結果にもとづいて、佐藤彰男が「バングラデシュにおける都市マイノリティ…チッタゴン市のヒンドゥー教徒清掃労働者コロニー調査から……」(『大手前大学人文科学部論集』第1号、

2001年3月) を報告している。調査の方法、地域の概要については、佐藤論文に委ねる²⁾。

この総論では、社会階層と清掃労働の実態に焦点をしぼる。バングラデシュの階層構造について論じたものは少ない。邦文の論文としては、延末謙一(2000) や佐野光彦(2001) の中間階級について論じたものがあるにとどまる。そのためにバングラデシュの社会階層をどのように区分し、把握するのかについて定説らしきものはまだないといってよい。

バングラデシュの社会学者との会話のなかでは、アメリカ流のupper class, middle class, working class, lower classという区分がわかりやすいので用いられる。しかし、middle classが十分成長しておらず、貧困階層が多いバングラデシュで、先進国の社会階層区分を用いることがどの程度の有効性をもつのか疑問が多い。

一般に階層区分の指標としてあげられるのは、a) 職業、b) 収入、c) 教育程度、d) 住居(ないしは居住地区)、e) ライフスタイルなどである。バングラデシュで社会階層の区分を行うとすれば、どの指標を用いれば適切、有効な階層区分を行うことができるだろうか、上の項目だけで十分なのかなど、さまざまな角度からの検討が必要である。しかし、ここでは、そのような議論には深入りしない。BSCがバングラデシュの都市社会の中でどのような位置にあるのかを明らかにすることに焦点を絞りたい。主にとりあげるのは、収入と職業である。教育や住居については、別の機会に論じたい。

2. 所得にみる階層構造

2-1. 1998都市調査のよる10分位階層

バングラデシュにおいては、絶対的貧困が無視できない。必要なカロリーを摂取できる収入があるかどうかが目安となる。まず、バングラデシュの社会階層のありかたを、所得から見ておこう。

1998年にバングラデシュ統計局によって行われた「都市貧困観察調査報告書」(Report of the Urban Poverty Monitoring Survey)は、世帯収入、支出、その内容、危機の原因、借金の借り入れ先、使い道、年齢別の学歴構造など階層に関わるデータを調査している。この調査は、1995年から毎年継続的行われており、いかに政府がこの問題を重視しているのかがわかる。こ

表2-1. 10分位別所得 (1998年都市調査)

分位	人口	所得	累積人口	累積所得
1	7.8	1.2	7.8	1.2
2	7.8	2.6	15.6	3.8
3	8.1	3.4	23.7	7.2
4	9.3	4.2	33.0	11.4
5	9.7	5.2	42.7	16.6
6	10.3	6.5	53.0	23.1
7	10.7	8.3	63.7	31.4
8	11.1	10.4	74.8	41.8
9	11.3	14.6	86.1	56.4
10	14.0	43.6	100.1	100.0

Report of the Urban Poverty Monitoring Survey: April 1998から作成

表2-2. BSCの世帯収入の分布

1,000 - 1,499 tk	2	1.2%
1,500 - 1,999 tk	9	5.2%
2,000 - 2,499 tk	56	32.6%
2,500 - 2,999 tk	6	3.5%
3,000 - 3,499 tk	24	14.0%
3,500 - 3,999 tk	7	4.1%
4,000 - 4,499 tk	28	16.3%
4,500 - 4,999 tk	3	1.7%
5,000 - 9,999 tk	30	17.4%
10,000 tk 以上	6	3.5%
不明	1	0.6%
総数	172	100.0%

れ以上に信頼できるデータはないとされているが、全国調査ではなく、EAs (enumeration areas, 250世帯からなる調査区) を40地点抽出し、各調査区30世帯のサンプルを対象とした調査である³⁾。ここでは、最新の1998年調査データを使う⁴⁾ (これを「1998都市調査」と呼ぶ)。

表2-1は、階層をおよそ10に分け、それぞれの人口と所得をみたものである。最も貧しいグループ (7.8%) は総所得の1.2%しか獲得していない。下位33%を取り出しても、総所得のわずか11%にすぎない。他方、もっとも豊かなグループ (14%) は総所得の43.6%を獲得している。極めて不平等な社会であることがわかる。ジニ係数は0.43である⁵⁾。

2-2. BSCの世帯収入

では、BSCの世帯収入はどのようなものか。表2-2にみるように、世帯収入のモードは2,000~2,499tk⁶⁾のところにあり、56世帯と約3分の1がここに集中している。決して多くはない。

BSCの世帯収入は高くはないだろうという想定から、5,000tk以上は、選択肢を「5,000~9,999tk」と「10,000tk 以上」との2つに大きく括ったが、これは失敗だった。「5,000~9,999tk」に17.5% (30世帯) が入ってしまった。ここをもっと細分すればよかったと反省される。このように予想に反して、高所得とはいえないまでも、それなりの所得を得ている世帯が層として存在していることがわかった。

では、BSCは都市の階層構造においてどのような位置を占めているのだろうか。BSCは都市の最下層なのだろうか。「1998都市調査」の所得階層分布の中に位置づけてみよう (表2-3)。

「1998都市調査」では、高所得者 (9,000tk以上) が20%であるのに対して、BSCでは、高所得世帯 (1万tk以上) は3.5% (6世帯) と少

ない。5,000tk～9,000tk未満の中程度の所得を得るものは、「1998都市調査」では23%を占めるが、BSCでは18%（30世帯）とやや少ない。これに対して、2,000tkから5,000tk未満の低所得世帯は「1998都市調査」では42%を占めるが、BSCではそれを上回り73%（124世帯）と多くなっている。BSCは貧しい地区である。

バングラデシュの階層構造は典型的なピラミッド型である。スラムやスコッターの数は多く、人口も膨大である⁷⁾。ダッカのみでも、スラム住民は300万人以上と推定されている。ダッカのスラムを調査したAKM Ahsan Ullarらによれば、スラム住民の有業者の477人の月収は、500tk以下が38%、501～1000tkが31%、1001～2000tkが18%、2001～3000tkが13%である⁸⁾。

このようなスラムやスコッターの住民と比べてBSCの住民はどうだろうか。BSCでは2,000tk未満の貧困層は6%程度と少ない。「1998都市調査」の15%と比べてみても半数以下である。なかでも、BSCには1,000tk未満の極貧層は皆無である。スラムやスコッターの住民と比べれば、BSCの住民の所得は大きく上回る。

BSCは、1万tk以上のごく少数の豊かな家族

を頂点にし、下層が大きく膨らんだピラミッド型の階層構造をもつ低所得世帯を中心とする地区であるが、都市のなかでの最底辺層ではないことがわかる。

表2-3. 世帯収入のBSCと1998都市調査との比較

	都市部	BSC (%)	(%)
999tk以下	4.9	0	0.0
1000～1999tk	9.9	11	6.4
2000～2999tk	17.4	62	36.3
3000～3999tk	13.1	31	18.1
4000～4999tk	11.0	31	18.1
5000～5999tk	6.5	30*	17.5
6000～6999tk	7.8		
7000～7999tk	5.5		
8000～8999tk	3.5		
9000tk以上	20.3	6**	3.5
総数	100.0	171***	100.0

*5000～9999tk

**1万tk以上

***世帯収入不明1世帯

表2-4. 世帯収入による世帯の分布と貧困世帯出現率（1998都市調査）

	比率			実数			貧困世帯出現率
	全世帯	貧困世帯	普通世帯	全世帯	貧困世帯	普通世帯	
999tk以下	4.9	2.3	2.6	59	28	31	46.9
1000～1999tk	9.9	7.8	2.1	119	94	25	78.8
2000～2999tk	17.4	13.4	4.0	209	161	48	77.0
3000～3999tk	13.1	7.6	5.5	157	91	66	58.0
4000～4999tk	11.0	4.8	6.2	132	58	74	43.6
5000～5999tk	6.5	2.1	4.4	78	25	53	32.3
6000～6999tk	7.8	1.8	6.0	94	22	72	23.1
7000～7999tk	5.5	1.3	4.2	66	16	50	23.6
8000～8999tk	3.5	0.6	2.9	42	7	35	17.1
9000tk以上	20.3	1.3	19.0	244	16	228	6.4
総数	99.9	43.0	56.9	1200	515	685	42.9

Report of the Urban Poverty Monitoring Survey : April 1998から作成
なお、各セルを累計すると1200世帯にならないが、各セルの数字はそのままとした。

これを、別の角度からみてみよう。「1998都市調査」では、一日のカロリー摂取量を基準に貧困世帯とそうでない世帯を分けている。一日の2,112Kcalを補うためには一人当たり月849,26tkが必要とみて、それを満たせない貧困線以下の世帯は1200世帯のうちの515世帯(43%)としている。圧倒的な多さであり、バングラデシュの都市には、肉体的な再生産もままならない貧困層が大量に存在する。

貧困世帯出現率を階層別にみると、表2-4のように、月収1000~1999tkの世帯では79%、2000~2999tkの世帯では77%と高率である。月収が5000~5999tkほどあっても、貧困世帯出現率は32%である。世帯員数が多いのだろう。

これをBSCの場合に当てはめると、どのようになるのだろうか。表2-5は、世帯員数別に世帯収入を集計したものである。厳密には、子どものカロリー摂取量が少ないことを勘案しなければならないが、単純に世帯員数に850tkを掛けると、2人で1700tk、3人で2550tk、4人で3400tk、5人で4250tk.....となる。収入の区切りが粗いので、正確な数は算出できないが、貧困線を確実に下回る世帯収入の家族は、単身世帯や2人世帯ではゼロ、3人家族では6世帯、

4人家族では16世帯、5人家族29世帯.....とあわせて99世帯(58%)にもなる。これは、さきの「1998都市調査」の43%を大きく上回る。子どもの数や年齢を考慮すれば、もうすこし少なくなる可能性もあるが、それを差し引いても膨大な絶対的貧困層が存在していることがわかる⁹⁾。

3. 職業にみる階層

3-1. 1998都市調査の場合

つぎに職業からみてみよう。表3-1は、「1998都市調査」により職業別に世帯主の収入と支出をみたものである。「リキシャ・バン・手押し車の運転手」の一人当たり月の平均収入は、576tkと信じられないくらい低い。「農業労働者」の564tkと並んでもっとも低収入の職業である。逆に、この表のなかで最も高い収入を得ているのは「専門・技術職」(2,987tk)である。「スポーツ・リクリエーション従事者」も、これと並んで高い(2,573tk)が、数は多くない。いずれも3,000tkにも満たない¹⁰⁾。

もちろん同一の職業であっても、雇用条件や賃金形態によって収入は大きく変わる。単純に

表2-5. BSCの世帯員数別世帯収入

	1000tk~	1500tk~	2000tk~	2500tk~	3000tk~	3500tk~	4000tk~	4500tk~	5000tk~	10000tk~	総数	%
1人			1								1	0.6
2人		2	4		1						7	4.1
3人	1	1	4	1	2		1		1		11	6.4
4人	1	2	13		5	1	4	1	2		29	16.9
5人		3	16	2	5	3	13		8		50	29.1
6人			7		7		3	1	5	1	25	14.5
7人		1	6	3	3	1	5		6	2	27	15.7
8人			3		1	2	2	1	6		15	8.7
9人			1						1	2	4	2.3
10人			1						1		2	1.2
13人										1	1	0.6
総数	2	9	56	6	24	7	28	3	30	6	172	100.0
%	1.2	5.2	32.6	3.5	14.0	4.1	16.3	1.7	17.4	3.5	100.0	

職業によって収入の高が決まるわけではない。しかしながら、これらの職業と収入から、ラフな階層イメージを浮かべることができる。比較的安定的な収入が得られるのは、「専門・技術職」、「スポーツ・リクリエーション」などの専門職である、他方で、不安定、低収入の職種は、「リキシャ・バン・手押し車の運転手」、「建設労働」、「電気・ガス・水道関係労働」などの野外労働者、未熟練の肉体労働者である。道ばたでレンガを割る労働者の姿をよく見かけるが、これはもっとも低賃金で評価も低い。

この中間にさまざまな職業が位置づけられる。われわれの予想に反して、「経営・管理職」や「教職」は、それほど高い収入を得ているわけではない。せいぜい1,100tk程度である。これは「生産過程の労働」とほぼ同じである。これらの職業は高学歴層のつく職業である。それ

にもかかわらず、この程度の収入にとどまっているということは、何を意味しているのだろうか。そもそもバングラデシュでは安定的な収入を得る雇用機会は絶対的に不足しており、ミドル・クラス向けの就労の場が極めて限られている。その結果、就労をめぐる高学歴者間の競争が苛烈になり、相対的な賃金低下を招いている。教育に投資した経費を回収できるほどの、賃金を得ているものは少ない。ミドル・クラスは、バングラデシュでは育っていない。

一方、スラムやスコッターの住民は、どのような仕事に従事しているのだろうか。AKM Ahsan Ullaらが調査したダッカのスラム住民の職業はつぎのようなものである。成人男性236人の職業を多いものから順にあげると、工場労働者12.6%、力車曳き10.8%、行商人(hawkers)10.8%、日雇人夫8.5%、物乞い7.8%、手押し

表 3-1. 職業別世帯主の収入と支出
(一人当たり月平均 (tk)、1998年都市調査)

	世帯比率 (%)	収入 (tk)	支出 (tk)
a. 農業			
自作農	2.8	939.3	1071.9
自作兼小作	1.0	852.5	796.7
農業労働者	1.4	564.2	686.9
畜産/漁業	1.0	775.2	722.7
b. 非農業			
経営・管理職	21.7	1,170.7	1,182.3
専門・技術職	2.0	2,987.5	2,169.7
営業・販売	25.4	1,679.4	1,297.8
教職	2.1	1,108.5	1,053.7
スポーツ・リクリエーション	0.3	2,573.7	1,739.7
生産過程の労働	5.6	1,119.3	957.1
建設労働	3.4	670.8	591.2
電気・ガス・水道関係労働	0.7	773.9	670.8
職人	1.5	950.2	1,053.8
運輸関係労働	4.3	701.0	681.4
リキシャ・バン・手押し車の運転手	5.0	576.2	606.7
仕立・理容・洗濯サービス	1.0	1,714.6	904.7
その他	17.7	1,792.9	1,235.6
総数	100.0	1,425.6	1,171.3

Report of the Urban Poverty Monitoring Survey : April 1998から作成

車運転手6.7%、店の手伝い5.9%、店主4.4%、レンガ職人4.1%、テンプー運転手4.1%、レンガ割り3.7%、スクーター運転手3.3%、使い走り2.2%、修理人1.8%、自営業1.4%、警備員1.1%、事務手伝い1.1%、タイピスト0.7%、茶売り0.7%、交通警察0.3%、船員0.3%、リフト運転手0.3%、事務員0.3%、回答拒否6.3%である¹¹⁾。

工場労働者は首位にあるが、わずかに1割程度にとどまる。大半はインフォーマルセクタに属する雑業的なものである¹²⁾。注目されるのは、物乞いが職業として認識されていることであり、かなりの比重をもって存在する。

清掃関係の仕事に従事するものは、成人男性ではないが、年少者(5歳~19歳)ではいる。屑拾い(scavenger, tokais)が年少者の10%を占め、掃除夫が2.1%(11人)である。成人女性では掃除婦は2.4%(4名)である。なぜ成人男性が清掃関係に従事していないのだろうか。調査地による偏りか、単なる偶然か、その

理由はわからない。

3-2. BSCの就業状況

職業からみたBSCの階層的な位置はどのようなものであろうか。これを検討する前に、就業状況をみておこう。今回の調査で把握しえたBSCの住民は949人である。そのうち就業可能な14歳以上人口は581人である¹³⁾。有業者は315人で54%を占める(表3-2)。

有業者(315人)のうち、「常雇」は62%を占め、「臨時雇」は29%である。「日雇」(4%)や「パート」(3%)は少ない(表3-2)。男女を比較すると女性の方が「常雇」がやや多く、「臨時雇」が少なくなっている。

「交代労働(replaced laborer)」というのは、父や夫が何らかの事情で働けなくなった場合、その家族の誰かが交代に働きに行くことである。就労の権益が個人に帰属しているのではなく、家族に帰属しているとみて、家族の生計維持のために家族員に代替の労働の権利を認める

表3-2. BSCの就業状況(14歳以上人口)

	有業者						有業者 小計	無職	不明	総数
	常雇	パート	臨時雇	日雇	交代労働	勤労学生				
14-17歳	2	1	6	2			11	77	3	91
18-19歳	11	1	10	2	1		25	56	1	82
20-29歳	35	4	41	1	3	1	85	53		138
30-39歳	49	2	24	4	1		80	26	1	107
40-49歳	56	1	5	2	1		65	14		79
50-59歳	34		3		1		38	7		45
60-69歳	9	1					10	17		27
70歳以上			1				1	11		12
総数	196	10	90	11	7	1	315	261	5	581
%	33.7	1.7	15.5	1.9	1.2	0.2	54.2	44.9	0.9	100.0
%	62.2	3.2	28.6	3.5	2.2	0.3	100.0			
男性	128	6	68	6	3	1	212	88	4	304
%	42.1	2.0	22.4	2.0	1.0	0.3	69.7	28.9	1.3	100.0
%	60.4	2.8	32.1	2.8	1.4	0.5	100.0			
女性	68	4	22	5	4	0	103	173	1	277
%	24.5	1.4	7.9	1.8	1.4	0.0	347.2	62.5	0.4	100.0
%	66.0	3.9	21.4	4.9	3.9	0.0	100.0			

表3-3. BSCの無職率、失業率

		総数	無職	失業中	無職者率	失業者率
総数	14-17歳	91	77	27	84.6	29.7
	18-19歳	82	56	26	68.3	31.7
	20-29歳	138	53	26	38.4	18.8
	30-39歳	107	26	16	24.3	15.0
	40-49歳	79	14	7	17.7	8.9
	50-59歳	45	7	2	15.6	4.4
	60-69歳	27	17	1	63.0	3.7
	70歳以上	12	11	2	91.7	16.7
	計	581	261	107	44.9	18.4
男性	14-17歳	46	35	15	76.1	32.6
	18-19歳	36	15	12	41.7	33.3
	20-29歳	70	15	9	21.4	12.9
	30-39歳	61	5	3	8.2	4.9
	40-49歳	44	4	1	9.1	2.3
	50-59歳	29	4	1	13.8	3.4
	60-69歳	14	7	1	50.0	7.1
	70歳以上	4	3	0	75.0	0.0
	計	304	88	42	28.9	13.8
女性	14-17歳	45	42	12	93.3	26.7
	18-19歳	46	41	14	89.1	30.4
	20-29歳	68	38	17	55.9	25.0
	30-39歳	46	21	13	45.7	28.3
	40-49歳	35	10	6	28.6	17.1
	50-59歳	16	3	1	18.8	6.3
	60-69歳	13	10	0	76.9	0.0
	70歳以上	8	8	2	100.0	25.0
	計	277	173	65	62.5	23.5

ものである。「交代労働」は、わずか（2%）であるが男女いずれにもみられる。

3-3. BSCの無職の状況

無職の状況をみておこう（表3-3）。無職者率は、50歳代で最も低い（16%）が、若くなるにつれて高くなり、18歳～19歳では飛躍的に増加し68%、14歳～17歳では84%となる。年長者に優先的に仕事をまわす慣行が存在しているのだから。そのため失業問題は若年層に現れる。

若年層の無職の理由をみると（表3-4）、「在学中」は14歳～17歳でこそ20%ほどみられるが、18歳～19歳ではわずか7%であり、多くはない。若年層の無職のもっとも大きな理由は、

「失業中」であり、14歳～17歳35%、18歳～19歳46%と大きな比重を占めている。若年層の失業には深刻なものがある。失業者率は、14歳～17歳30%、18歳～19歳32%である¹⁴⁾。

性別にみると、若年層の無職者率は、男性より女性の方が多くなっている（61% vs. 91%）。女性の無職の理由は、「家事」は49%を占めるが、「失業中」も31%もみられる。「在学中」は5%と、男性の30%と比べると極めて少ない。女性には進学することがあまり期待されていないことがわかる。

表3-4. BSCの無職の理由

	無 職 の 理 由							無職者 計
	在学中	高齢・引退	傷病・障害	家事	失業中	その他	N.A	
14-17歳	15		2	23	27	6	4	77
%	19.5		2.6	29.9	35.1	7.8	5.2	100.0
18-19歳	4		0	19	26	6	1	56
%	7.1		0.0	33.9	46.4	10.7	1.8	100.0
20-29歳	3			21	26	3		53
%	5.7			39.6	49.1	5.7		100.0
30-39歳			3	7	16			26
%			11.5	26.9	61.5			100.0
40-49歳		2		3	7	2	1	14
%		14.3		21.4	50	14.3	7.1	100.0
50-59歳		4					1	7
%		57.1					14.3	100.0
60-69歳		13						17
%		76.5						100.0
70歳以上		7						11
%		63.6						100.0
総数	22	26	7	74	107	18	7	261
%	8.4	10.0	2.7	28.4	41	6.9	2.7	100.0
14-19歳 男性	15		0	1	27	4	3	50
	30.0		0.0	2.0	54	8	6.0	100.0
14-19歳 女性	4		2	41	26	8.0	2	83
	4.8		2.4	49.4	31.3	9.6	2.4	100.0
14-19歳 小計	19		2	42	53	12	5	133
	14.3		1.5	31.6	39.8	9.0	3.8	100.0

3-4. BSCの職業

BSCの職業をみると、有業者314人のうち、清掃以外の職業に従事しているものはわずかに4% (13人) のみである (表3-5)¹⁵⁾。比率にすれば94%のものが清掃関係に従事している。まさにこの地区は、sweeper coloney (清掃労働者地区) の名にふさわしく、単一の職種に特化している。

清掃関係のうち、最も多いのは「市雇用清掃作業員」で82% (258人) を占める。意外であったのは、各家庭に出かけトイレの清掃を行うものはわずか6人 (2%) と少なかったことである。また、自営業として清掃サービスを行っているものはまったく出てこなかった。

チッタゴンは300万人を越える大都市である。

現実には、家庭のトイレの清掃に従事する人たちが多数存在するはずである。しかし、この調査では把握できなかった。なぜだろうか。それには三通りの仮説がなりたつ。一つの仮説は、この地区が単なる清掃労働者の地区だけではなく、市の清掃作業員のための従業員住宅という性格を強くもつ。そのため民間部門で担われる家庭のトイレ清掃従事者が住めなくなっているのではないか。

第二の仮説は、地区による分業が成立しているためではないか。チッタゴン市内には、Madarbar、Jhaotala、Fringi Bazarなどの清掃労働者地区がある。家庭のトイレ清掃は、他の地区によって担われているという可能性がある。

表 3-5. BSCの就労形態別職業

	市雇用の 清掃作業員	家庭の清 掃作業員	工場の 清 掃	官庁病院 の清掃	NGOの 清 掃	学校の 清 掃	その他の 清 掃	その他の 職 業	不 明	総 数 %
常 雇	173	2		5	4	2	3	6	1	196
	88.3	1.0		2.6	2.0	1.0	1.5	3.1	0.5	100.0
パート	5	2						1	2	10
	50.0	20.0						10.0	20.0	100.0
臨時雇	73	1	1	3	6	1	1	2	2	90
	81.1	1.1	1.1	3.3	6.7	1.1	1.1	2.2	2.2	100.0
日 雇	4	1	1		1			4		11
	36.4	9.1	9.1		9.1			36.4		100.0
交代労働	3				4					7
	42.9				57.1					100.0
総 数	258	6	2	8	15	3	4	13	5	314
%	82.2	1.9	0.6	2.5	4.8	1.0	1.3	4.1	1.6	100.0

第三の仮説は、この地区には家庭のトイレ清掃を行うものが現実には存在するが、副業形態であるために回答されなかったののではないか。今回の調査票には、副業を聞く欄を設けていなかったために、この可能性は大いにありうる。

バングラデシュでは家庭のトイレの汲み取りは、バキューム車を使った汲み取り作業ではない。浄化槽の清掃作業も大量の水を使って排水溝や川に流すという作業が一般的であり、その作業は、寝静まった深夜に行われる。それに従事するものが、昼間は市の清掃作業員として働いている場合、副業的なものとして回答されない。

さらには、これには職業のランク付けも絡んでいるかもしれない。トイレ清掃が低く評価されるならば、二つの仕事をやっていれば、体裁のよい方だけを答えることもあるだろう。

いずれの仮説が妥当するのだろうか。現実には、これらの2つないしは3つの複合的な結果かもしれない。これについては、今後の聞き取り調査で確かめる必要がある。

さて、清掃労働と一口にいても、その内容はさまざまである。それをみたのが表3-7で

ある。最も多いのは「街路の清掃」47% (147人) である。ついで「側溝の清掃」21% (65人) である。「収集・運搬」6% (20人)、「ゴミ収集」6% (19人) などもみられるが、ここでも「便所の清掃」4% (11人) や「汚物運搬」1% (4人) は少ない。清掃作業のなかでも、人々から忌避される度合いの強い職種に従事しているものが少なかったことが注目される¹⁶⁾。

なぜだろうか。これについては、BSCの清掃労働者の大半が市に雇用されていることと関係している。各家庭での「便所の清掃」や「汚物運搬」は、民間部門にゆだねられ、市の清掃事業はこのような家庭を対象としてサービスは行っていないからである。とはいえ、公共施設には当然トイレがあるから、その清掃は誰が担っているのだろうか。市雇用清掃作業員で「便所の清掃」を行っているものは、わずか6人である。その人数だけではカバーしきれものではない。

また大都市であるチッタゴンには、市に雇用されている清掃労働者以外に「官庁や病院の清掃作業員」や「学校の清掃作業員」や「工場の清掃作業員」など清掃関係の仕事に従事しているものは多数にのぼるだろう。しかし、民間部

門の清掃労働者は、BSCには極めて少ない。すでに指摘したように、これらに従事するものは、他のsweeper colonyに居住している可能性がある。清掃作業の内容別に他の地区との分業、棲み分けが行われているのだろうか。そうだとすれば、清掃労働という資源をめぐる地区間の葛藤があり、力関係によって社会的資源の配分が決定されているのかもしれない。そういう観点から、他の清掃労働者地区との比較研究が必要であろう。

ヒンドゥー宗教の浄穢観の影響を受け、忌避感情が強くもたれる「人や動物の死体の運搬、埋葬」に従事するものがまったくいなかったこと、また他のカーストのものが就労することがほとんど考えられない「便所の清掃」、「汚物運

搬」に従事するものが極めて少なかったことなどは、この地区の特徴として指摘できる。しかし、それが実態そのものであるのか、あるいは人々の意識を媒介として歪曲された結果であるのか、慎重な検討を要する。

また、調査方法が影響している可能性も棄てきれない。今回の面接調査は、チッタゴン大学社会学部の大学院生が行った。彼らは被調査者とは大きく異なる。まず第一に彼らはモスリムであり、所属エスニック集団が異なる。第二に使用言語はベンガル語であり、被調査者のヒンズー語と異なる。第三に大学院生という存在も、非識字者が多いBSCの住民とは異質であり、文化的背景も大きく異なる。被調査者から見れば、調査者は見知らぬ外部の人間であり、どれだけ

表3-6. BSCの年齢別男女別職業

		市雇用の 清掃作業員	家庭の清 掃作業員	工場の 清掃	官庁病院 の清掃	NGO の清掃	学校の 清 掃	その他 の清掃	その他 の職業	不明	総数
総数	14-17歳	6				1			3	1	11
	18-19歳	19	1	1		1			3		25
	20-29歳	67	2		1	6	3	1	2	2	84
	30-39歳	67	1	1	2	5			4		80
	40-49歳	57	1		3			3	1		65
	50-59歳	34	1		2	1					38
	60-69歳	8				1				1	10
	70歳以上 計									1	1
	計	258	6	2	8	15	3	4	13	5	314
男性	14-17歳	5				1			2	1	9
	18-19歳	15	1	1		1			2		20
	20-29歳	44	2		1	4	1	1	1		54
	30-39歳	45	1		1	5		3	3		55
	40-49歳	35			1			3	1		40
	50-59歳	22			2	1					25
	60-69歳	5				1				1	7
	70歳以上 計									1	1
	計	171	4	1	5	13	1	4	9	3	211
女性	14-17歳	1							1		2
	18-19歳	4							1		5
	20-29歳	23				2	2		1	2	30
	30-39歳	22		1	1				1		25
	40-49歳	22	1		2						25
	50-59歳	12	1								13
	60-69歳	3									3
	70歳以上 計										0
	計	87	2	1	3	2	2	0	4	2	103

表3-7. BSCの職業別清掃労働の種類

	街路	側溝	便所	ゴミ収集	汚物運搬	収集運搬	その他	不明	総数
市雇用清掃作業員	142	61	6	17	2	19	6	5	258
%	55.0	23.6	2.3	6.6	0.8	7.4	2.3	1.9	100.0
家庭の清掃	2		1				2	1	6
%	33.3		16.7				33.3	16.7	100.0
工場の清掃					1		1		2
%					50.0		50.0		100.0
官庁病院の清掃		2	1	2	1		1	1	8
%		25.0	12.5	25.0	12.5		12.5	12.5	100.0
NGOの清掃	2	1	1			1	9	1	15
%	13.3	6.7	6.7			6.7	60.0	6.7	100.0
学校の清掃							2	1	3
%							66.7	33.3	100.0
その他の清掃	1	1	2						4
%	25.0	25.0	50.0						100.0
その他の職業							6	7	13
%							46.2	53.8	100.0
不明								5	5
%								100.0	100.0
男性	74	57	8	18	4	20	16	14	211
%	35.1	27.0	3.8	8.5	1.9	9.5	7.6	6.6	100.0
女性	73	8	3	1			11	7	103
%	70.9	7.8	2.9	1.0			10.7	6.8	100.0
総数	147	65	11	19	4	20	27	21	314
%	46.8	20.7	3.5	6.1	1.3	6.4	8.6	6.7	100.0

うち解けて、調査に応じたのか。これらの調査者と被調査者と壁が回答者の側に何らかの影響を与えた可能性も考えられる。

4. 市雇用の清掃労働者

4-1. エスニック構成

1998年の第1次調査の時に、モスリムの人々が清掃労働に参入しているという極めて興味深い事実を知った¹⁷⁾。今回、チッタゴン市が何人の清掃労働者を雇用しているのかを聞いた。その結果をまとめたのが表4-1である。常雇は831人、日雇は897人、あわせて1,728人である。人口300万都市にしては多くはない。宗派別の内訳は、ヒンドゥー1,085人(63%)、モスリム

641人(37%)、仏教徒2人(0.1%)である¹⁸⁾。チッタゴン市の人口ではヒンドゥーの占める割合は12%にすぎないから、清掃労働に占めるヒンドゥーの割合が極めて高い。

しかし、そうみるのではなく、逆に、独占的に清掃人カーストに担われてきた領域にモスリムが進出してきた事実の方を注目すべきであろう。清掃労働は、伝統的には清掃人カーストの役割であり、他の人々は忌避してきた。そのような職業領域に、モスリムが参入してきた背景には何があるのだろうか。清掃労働の近代化だろうか、それとも職業観の変化だろうか。

清掃労働の大部分は手作業であり、機械化は遅れている。道路清掃は、箒と一輪車という道具だけの手作業である。ゴミの運搬車にはパッカー車は使われていない。トラックの荷台にむ

き出し状態で運搬しており、焼却工場はなく、郊外に投棄されているだけである。下水道はチッタゴン市では普及率はゼロに近く、バスケット型トイレが1982年の市の条例によって禁止されるようになったとはいえ、トイレや浄化槽の近代化が図られたとはとうてい言えない。清掃作業が清潔なものになったとは言い難い¹⁹⁾。

作業内容にみるべき変化がなかったとすると、考えられるのは、雇用の機会の絶対的な寡少性である。慢性的な失業状態のなかでは、農村から都市に流入した人々が、見つけられるのはインフォーマルセクターの不安定な仕事である²⁰⁾。それに比べれば、市雇用の仕事は、安定した賃金の得られる仕事である。清掃労働といえども、極めて魅力的に映るようになってきたのかもしれない。

しかし、いかに安定した就労であろうとも、高収入が得られようとも、清掃労働であれば絶対に就かないというような強い忌避感情があれば、清掃労働は清掃人カーストの独占市場であり続けるだろう。しかし、実態の変化からすれば、ムスリムの貧困階層の人々にとっては、清掃労働への忌避感情は弱くなってきたのだろう。

他方、ヒンズーの他のカーストの人々が清掃労働についているという話は聞かない。清掃労働に対する忌避観は、ムスリムとヒンズーとの間で大きな差がみられるのだろう。

4-2. 清掃部門構成

清掃事業は中央政府の監督指導を受けている²¹⁾。常雇の清掃労働者の定員は、人口によって定められており、チッタゴン市の定員は800人である²²⁾。これでは増加する事業量をとうてい処理できない。そのために臨時雇の清掃作業員を雇用している。表6-1では、臨時雇は897

人であるが、市保健局の管理部長によれば、1,100人を雇用しているという。雇用方法は、縁故採用ではなく、新聞広告などによって公募しているというのが公式見解である。

市保健局の管理部長から聞き取ったことを図にしたのが図6-1である²³⁾。保健局は、管理部門とエンジニアリング部門の2つに大きくわかれている。清掃事業は、管理部長(Chief Conservancy Officer)の下に地区別に6名の監督官(Superintendent)が置かれ、その指導下に検査官(Inspector)がいる。検査官は41の区(Ward)ごとの1名に6名を加えた47名である。そのもとに54名の現場監督(Supervisor)おり、そこに作業員が配置される。

表4-1. チッタゴン市雇用の清掃労働者

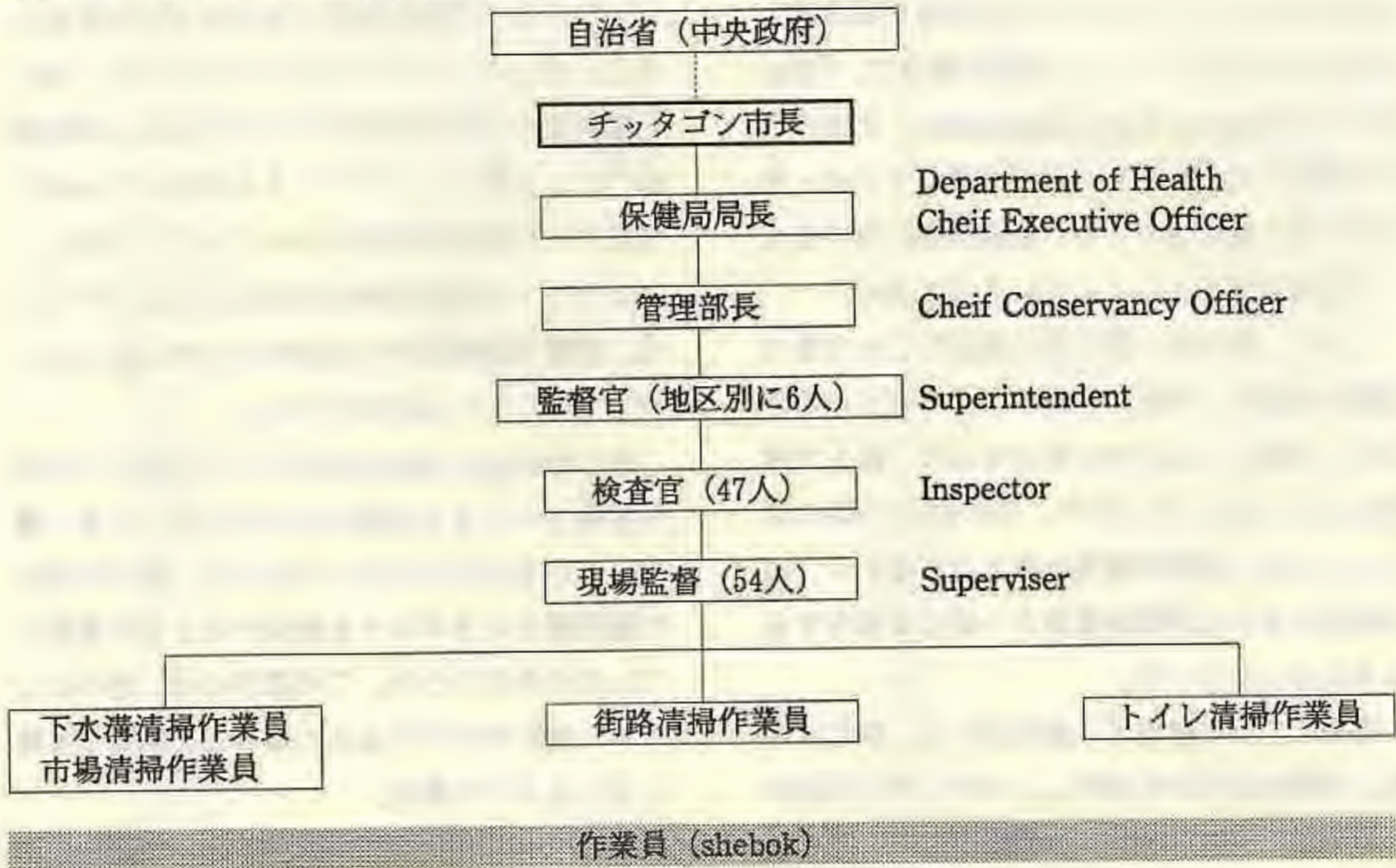
	常雇	%	臨時雇	%	計	%
ヒンドゥー	509	61.3	576	64.2	1,085	62.8
モスリム	321	38.6	320	35.7	641	37.1
仏教徒	1	0.1	1	0.1	2	0.1
計	831	100.0	897	100.0	1,728	100.0
うちBSC	173	20.8	82	9.1	255	14.8

市内に12カ所の重要監視地点(VIP Spot)があり、管理部長は、毎日そこを監視している。現場監督になるには、短大・専門学校(college)卒の資格が必要とされる。かつてはJamadar(現場監督)と呼ばれていたが、政府の指導により1982年からSupervisorという役職名が使われるようになった。

現場作業は、下水溝清掃分野、街路清掃分野、トイレ清掃分野の3つに分かれている。下水溝清掃分野には、最近市場の生ゴミの収集の仕事が追加されるようになった。清掃作業員はそのどれかに配属される。

下水溝清掃分野、街路清掃分野、トイレ清掃分野の3つについては同一賃金である²⁴⁾。下水溝清掃分野と街路清掃分野とは相互に人事交流をしている。また、トイレ清掃分野から、下水

図4-1. チッタゴン市の清掃局の組織図



溝清掃分野や街路清掃分野への移動は行われても、逆の移動はないという。このことから、トイレ清掃は嫌がられた職務として認識されていることが推測できる。

臨時雇の日当は、45tkであったが、現市長になってから60tkになり、現在は70tkである。20日働いたとして月収は1,400tk、25日働けば1,750tkである。

モスリムの清掃労働者2人への聞き取り調査を行った。一人は40歳の女性である。もう一人は22歳の男性である。女性はチッタゴン出身で、12年前から清掃労働に従事している。溝掃除担当の臨時雇で、3代前の市長に頼んで雇用してもらったという。勤務時間は朝7時から2時である。男性はコミラ県出身で、数年前から臨時雇の形態で作業員になっている。トラックに乗ってゴミの収集運搬を行っている。勤務時間は朝6時から3時であり、先の女性より2時間長い。5人で一つの作業班をつくり、2人がヒ

ンドゥー、3人がモスリムである。作業班が宗派別に分けられていることはなさそうだ。月収は2,200tkである。常雇になることを望んでいる。もし、トイレ清掃分野を担当することになれば、どうかと訊ねたところ、「常雇になるのなら、トイレ清掃分野でもかまわない」と言っていた。上司も同席していたインタビューなので優等生的な答えがもどってきたのかもしれないが、タテマエではトイレ清掃部門は忌避されていない。

現在の市長ABM Mohiuddin Chowdhuryは、清掃労働者に対する差別をなくすために積極的である。清掃労働者が食堂に入ることを拒んだり、食事を一緒にすることを嫌がることなど、ひどい差別があったことをはっきりと認め、人々の意識を変える必要があることを熱心に語っていた。私がSweeperという言葉を使うと、市長は「Sweeperではない、Shebokと言いなさい」と強くたしなめた。Shebokとは、ベンガ

ル語でサービスをする人、世話をする人という意味である。チッタゴン市では清掃作業員は、Shebokと呼ばれている。清掃作業員は、「Shebok、Chittagong City Corporation」と表示された黄色いゼッケンをつけて作業している。市長は呼称を変えることで、清掃労働に対する人々の意識を変えようとしているのである。

しかし、現実には、聞き取り調査をした女性の清掃作業員は、黄色いゼッケンをつけているときは、食堂に入るのをひかえており、路上で昼食をとると語っていた²⁵⁾。今の市長の時代になってから、清掃作業員を見る目が変わり、市の幹部クラスも清掃作業員と一緒に食事をするようになったという。

市長は、折に触れて「血も赤いし、同じ人間だ。母親は生まれた赤ちゃんのウンチの世話をしている。Shebokは、そのような母と同じ仕事をしている。母と同じだ。なんで差別することができようか」と皆にわかりやすい言葉で語っている。

市長は、BSCの一角に国立の小学校を誘致し、BSCの子どもたちが通えるように力を入れている。一方、BSCのリーダーたちは、もっと清掃労働者を雇用するように市長に強く訴えている。市長は、常雇については定員の枠があるので増員は難しいが、臨時雇の形でできるだけ雇用するように努力すると答えている。

実態調査で明らかになったBSCの市雇用の清掃労働者と、上記の市雇用の数字とを比べてみよう。常雇の清掃労働者は831人である。そのうちBSCは173人で全体の21%を占めている。ヒンドゥー常雇清掃労働者のうちにBSCが占める比率は34%である。

清掃労働者地区は、チッタゴン市にはBSC以外に3地区があることはすでに述べた。清掃労働には、他のカーストのものが従事することはほとんど考えられないから²⁶⁾、残りの336人は

これらの3地区の居住者と思われる。

ヒンドゥー清掃労働者におけるBSCの位置は大きいですが、その一方で、注目されるのは、BSCの臨時雇の清掃労働者の少なさである。臨時雇は73人、日雇4人、パート5人を含めても82人であり、市雇用の897人のわずか9%である。ヒンドゥーの臨時雇の14%を占めるだけである。常雇と臨時雇での占有率の大きな違いはどうして生じているのだろうか。

他のsweeper colonyと比べて、BSCの人たちが常雇というより安定したポストをより多く獲得しているのだろうか。それとも、新たに増えた臨時雇というポストを獲得することに苦戦しているためだろうか。この数字には、他のヒンドゥー地区やモスリムとの微妙な力関係が反映しているようである。

BSCのリーダーたちとのインタビューの時に、市長に仕事を要求しているのだと言って、求職者のウェイティング・リストを見せてくれた。要求の甲斐があって、そのうち誰それは臨時雇の仕事につけるようになったと指で示してくれた。その表情から、要求は切実なものであることが感じ取れた。臨時的な不安定な臨時雇の職といえども、BSCの人々にとっては貴重な就労の場であるのだ。既にしめした表3-3の失業者率は、それを示している。若年層の失業者の多さだけでなく、20歳代から40歳代にかけての女性の失業者率も高い。それだけ就労へ意欲的であることがわかる。働かざるをえない生活の逼迫があるのだろう。

5. もうひとつの清掃労働

民間の事業所の清掃労働の実態はどのようなものだろうか。その一例としてチッタゴン眼科病院の場合を紹介しよう。チッタゴン眼科病院(Chittagong Eye Infirmary and Training Com-

plex) は、ドイツの財団の援助を受け、予防・治療と医学教育を目的に1979年に設立された。チッタゴン大学の眼科の教育機関も兼ねており、バングラデシュはいうにおよばず南アジアでも最も優れた眼科病院といわれている²⁷⁾。

この眼科病院の清掃労働者は、hygiene squad (衛生隊) と呼ばれている。なぜ、という質問に、事務局長は、sweeperという言葉が与えるイメージがよくないためと説明した。hygiene squadは、下水溝の清掃などの室外の清掃(10人)と、室内の清掃(30人)とに分かれる。室内の清掃はさらに2分され、患者の排泄の世話と汚物の処理である。担当者は男女ほぼ同数で女性患者には女性の、男性患者には男性の清掃員が担当し、性別分業が厳しく守られている。このようなことは、日本では看護婦がするが、バングラデシュでは看護婦はやらない。清掃に対する忌避意識が作用しているのか清掃と看護の区別は明確である。もう一つの作業内容は、床やトイレの清掃、窓ガラス磨きなどである。トイレの清掃と下水溝の清掃は男の仕事である。この病院には浄化槽(septic tank)が12カ所にあり、一杯になると汚泥をトラックで搬出して集積所に投棄する。

職種としては、室外の作業員と室内の作業員が区分されているが、それ以上の区分けはなく、曜日などによってスケジュールを決め、交代制で行っている。清掃労働者の賃金は2,200tkから2,500tkである。ちなみに、看護婦は平均4,000tkであり、これよりはるかに下回っている²⁸⁾。

事務局長の話では、中卒程度の学歴をもつものを、新聞広告で募集し、面接で採用を決定する。sweeperではなくhygiene squadとして募集するためか、ヒन्दゥーの清掃人カーストの人たちは応募してこないという。希望者が多く、競争率は10倍程度と高い。実際の作業内容が清

掃だとわかると、応募を取り下げる人もいるが、それもごくまれである。作業員の構成は、ヒन्दゥーとモスリムと半々である。作業員たちは仕事にプライドをもっており、この病院で働けることを幸せに感じていると事務局長はいう。

6.まとめ

チッタゴンの清掃労働者地区であるBSCがバングラデシュの都市社会でどのように位置づけられるのかを検討してきた。ここでとりあげた階層区分の指標は、世帯収入と職業である。教育程度や住居(ないしは居住地区)については、別の機会を検討する。

世帯収入や職業的地位の分析から明らかになったように、BSCはバングラデシュの階層構造のなかで最低辺に位置するものではない。世帯収入からみれば、BSCは低所得者の地区ではあるが、スラムやスコッターほど悪くはない。就労状況は、市雇用の常雇労働者が55%を占めており、安定雇用の状態にある。臨時雇・パートなどを含めた市雇用の労働者は有業者の82%にもなる。大部分が雑業・不安定で半失業状態にあるスラムやスコッターの住民と比べるとかなり恵まれたものである。

今回は詳しくは触れなかったが、就学状況や進学状況はよくない。就学率・識字率は低い。世帯収入からみるともっと良くても不思議ではない。

BSCの住宅は市の従業員住宅という性格をもつ。農村から都市への流入者を受け入れる市内各地のスラムやスコッターの仮小屋(カッチャ)と比べるとかなり恵まれたものである。BSCの住居は、四階建などの集合住宅、平屋の長屋など、建設時期によりさまざまなタイプがあるが、概して住宅事情のよくないバングラデシュにあってはミドルクラスの住宅と遜色のないもの

であろう。とはいえ、過密状況や排水溝がなく、住宅の裏側はドブ川のようにになっていることや、地区内道路をブタが歩き回り、ゴミが散らかっているなど衛生状態や維持管理はよくない。

このようにいくつかの諸指標ごとに、BSCの位置は異なる。ある指標ではミドルクラスなみ、別の指標では安定した労働者クラス、また別の指標では、最底辺の階層と同じであり、階層的ファクターの不一致状況がみられる。

経済的な階層の位置と社会的差別とはまた別である。差別—被差別という関係では、BSCは極めて厳しい状況に置かれている。居住の自由はない。他の市内で住むことは極めて難しい。姓によって清掃カーストに属することがわかるからだ。姓は見えるシンボルである。だから、転出する場合は姓を変えて、所属カーストがわからないようにするという。安心して住めるのは、他の地域からは隔離されて、ゲットー化されたBSCである。また、地区外の学校へ通学することになると、教師や生徒からさまざまな差別的な扱いを経験することになる²⁹⁾。カレッジや大学に進学する機会も極めて制限されている。

このような被差別の状況と経済的位置とは一致するものではない。伝統的な浄穢観念からすれば、最下層に位置づけられ忌避される地区であるが、経済的にも居住条件でも、スコッターより上の階層に位置づけられる。この逆転現象がさまざまな社会関係に影響をおよぼしているだろう。田中雅子の報告によれば、ネパールでも逆転現象が起こっている。清掃労働は、ネパールではボレ、チャメ、ハラフルと呼ばれる清掃カーストがになっており、市や病院の清掃員として働き、副業もあり、経済的にみれば最も貧しい層ではない³⁰⁾。「仕事を獲得するチャンスの少ないネパールにあっては、そのことがか

えって上位カーストによる差別を強め、清掃カーストはこの仕事だけに携わってほしい、ひいては自分たちはごみ問題に関わらなくてよいという意識を増幅させてきた³¹⁾という。

BSCの特徴を大きく決定しているのは、このように市雇用の清掃労働者の街という性格である。この地区でも、コックスバザールの地区でも、「清掃の仕事をするためにイギリス時代にウッタープラデッシュのカンプールから連れてこられた」と語り継がれている。この記憶は、「だから、市は仕事と住むところを保障する義務がある」と市に対して要求する根拠となっている。BSCの住民から見れば、市による仕事と住居の保障は十分なものではないだろう。それらをめぐってBSCの住民たちは、チッタゴン市長へ要望を出している。

仕事と住居をめぐるポリティックスは、他のエスニック集団や同一カースト内でのさまざまな葛藤と共闘を生みだしている。他の限られた資源の獲得をめぐる、BSCは他の清掃カースト地区との間でどのような関係にあるのだろうか。競合か、それとも共闘関係にあるのだろうか。この点については今後の調査が必要である。

今回の調査の収穫は、従来は忌避されてきた清掃労働の分野へのモスリムの進出を確認できたことである。市雇用の清掃労働者に占めるモスリムの比率は、常雇で39%、臨時雇では36%である。大きく浸食しており、清掃労働はもはや清掃人カーストの独占的労働市場でなくなっている。これは、バングラデシュにおける清掃労働に対する観念の変化の結果であり、また原因でもある。高い失業率は、限られたポストをめぐる今後さらに一層激しい競争をまきおこしていくだろう。それが、colony間の競争となっているのか、あるいはモスリム—ヒンドゥーという対立軸をめぐるものとなっているのか。あるいは、単に個人間の競争という性格をもつ

か。この解明は今後の課題である。これを明らかにすることによって、エスニック関係の重要性や、清掃人カースト内部の葛藤・対立関係の位置など、バングラデシュ社会の性格を明らかにすることができるだろう。

BSCの実態調査を行って、極めて予想外だったのは、民間部門の清掃労働に従事しているものが極めて少なかったことである。とくに清掃部門でも最も忌避されているトイレの清掃作業に従事するものがほとんどいなかったことである。トイレの清掃作業という最も不浄視される領域は、われわれにとって依然として見えざるものであった。これが、他の地区の人々によって担われている可能性は高いが、BSCの人々の副業として行われている可能性も棄てきれない。

今回は、清掃労働のなかのさまざまな職種・労働内容についての選好性、忌避性、格付けなどは聞かなかった。トイレの清掃を清掃労働者自身どのように評価しているのだろうか。外部社会の人々が清掃に関する仕事に対してどのような貴賤・浄穢観念をもっているのだろうか。清掃労働者自身が清掃労働に序列化を行っているとすると、それは外部社会の価値観の内面化なのか、あるいは清掃労働者自身の内部での独自の価値基準や選好性に基づいているものだろうか。解明すべき課題は多い。

以上、今回の調査によって明らかになったこと、およびこれから解明すべき課題を述べた。清掃労働という一見マイナーな問題に見えるが、これはバングラデシュの階層関係、モスリム・ヒンドゥーのエスニック関係、ヒンドゥー内部のカースト差別など、重要な社会関係を解明するためには戦略的に重要な切り口となっている。

【注】

* Michihiko Noguchi 大阪市立大学人権問題研究センター教授

- 1) この調査は神戸学院大学の共同研究費の助成を得ておこなったものである。研究代表者は1998年～99年度三輪嘉男教授、2000年度谷口弘行教授である。研究会のメンバーは、上記のもの他、佐藤彰男（大手前大学）、佐野光彦（神戸学院短期大学）、坂本信司（神戸学院大学）、イフティカル・チョドリー（チッタゴン大学）、野口道彦である。
- 2) 面接調査は、チッタゴン大学イフティカル・チョドリー博士の指導のもとに、チッタゴン大学社会学専攻の大学院生が行い、172世帯から有効回答、世帯員942人からのデータが得られた。
- 3) 第1回は95年12月に行われ、以来毎年実施されている。調査区がどのような基準で選ばれたのかについて記載はない。しかし、poor (515世帯) とwell-off (685世帯) が対比し比較検討されているから、貧困層のみを対象とした調査ではなく、都市住民を代表するものとみてよいだろう。40のEAsがどの範囲からどのようにして抽出されたのかについて報告書に記載はない。ダッカ市中心に選ばれ、チッタゴン市など他の都市は含まれていない可能性が強い。
- 4) 調査時期は、1998年4月30日から5月14日
- 5) ジニ係数は、1995年0.49、1996年0.44、1997年0.43、1998年0.43であり、不平等は減少傾向にある。(Report of the Urban Poverty Monitoring Survey: April 1998, pp.23)
- 6) tk (タカ)、1タカは2.2～2.5円程度。2000年2月のレートは1ドル50.1タカ (1999年12月のレートは1ドル48.3タカ) であった。
- 7) AKM Ahsan Ullar et al. (1999) は、スラム数が調査ごとに違い、実態把握が難しいことを指摘している。ダッカ市内で、BRACの調査では4,000地区 (延べ面積1,089エーカー)、ATNテレビの報道では3,007地区 (延べ面積1,038エーカー)、スラム住民は300万人と推定されている。
- 8) AKM Ahsan Ullar et al. (1999)
- 9) 「1998都市調査」では、子どもの必要生活費をどのように見積もっているのか記載はない。
- 10) この表の数字は「一人当たりの収入」であるから、世帯主の収入を家族員数で割ったものであると思われる。そのためかなり低めの数字になっている。
- 11) AKM Ahsan Ullar et al. (1999)、スラムの若者 (5歳～19歳) 532人の職業を多い順に並べると、力車引き13.5%、一時的失業12.4%、屑拾い (Tokais) 10.0%、苦力 (クーリー) 7.3%、行商人 (hawkers) 7.1%、茶売り 5.5%、季節労働者5.1%、煉瓦割り4.5%、たばこ売り3.

- 6%、ホテルボーイ3.0%、力車押し3.0%、ガスバーナー修理工2.7%、テンプー助手2.4%、工場労働者2.4%、物乞い2.1%、掃除夫2.1%、アイスクリーム売り1.8%、店の手伝い1.7%、花売り1.7%、洗濯人1.7%、修理人0.9%、日雇人夫0.9%、車塗装0.9%、リフト運転0.3%、レンガ職人0.2%、不明3.2%である。
- 12) 高田峰夫が調査したチッタゴンのSコロニーの就労者の9割が、インフォーマルセクターに含まれる職種である。(高田峰夫、1995年)
- 13) バングラデシュでは労働可能な年齢は14歳以上である。0～5歳は124人、6～10歳は177人である。
- 14) 失業率は、労働力人口に対する比率である。ここでは総人口に対する比率なので失業者率と表現しておく。
- 15) 以下の有業者の分析では「勤労学生」1人を除いた314人を総数として集計している。
- 16) 「汚物運搬」はstool carryingの訳である。「人や動物の死体の運搬、埋葬」は、あらかじめ選択肢として設けて置いたが、皆無であった。
- 17) 野口道彦、1999年
- 18) 仏教徒2人は、最近建設された仏教徒用の火葬場の従業員である。
- 19) 篠田隆(1995 a)が、インド、グジャラート州の清掃労働の向上をはかる政策を詳しく報告している。
- 20) Nazemによれば、チッタゴンの年間人口増加率は6.96%で、そのうちの52.2%は農村からの流入人口による(1984年のNPPP調査結果)。
- 21) チッタゴン市は、city governmentではなくcity corporationであり、中央政府が権限をもっている。
- 22) チッタゴン市の人口は調査が不備で、よく分からない。1970年代の200万人から1980年代300万人、そして現在は350万人とも400万人とも推定されている。農村部からの流入人口が激増しているのも事実であるが、このように人口によって中央政府からの補助金が違ってくるので、多めに見積もる傾向があるようだ。
- 23) 市の清掃事業全体を鳥瞰できるような組織図はなかった。
- 24) 賃金、労働時間、休暇などについては市のService Ruleで定められている。
- 25) 上層階級の女性は高級レストランに入ることはあるが、一般にバングラデシュの庶民階級の女性が食堂に入るとはまれであるという注釈が聞き取りの後につけられた。
- 26) インド、アムダーヴァード市の場合、不可触カースト以外に清掃労働への参入はみられないと報告している(篠田隆、1995)
- 27) 調査期間中、私たちはチッタゴン眼科病院のゲストハウスに宿泊した。花が咲き乱れる庭を前にした部屋は疲れた身体を癒し、調査活動を快適に行うことができた。感謝したい。
- 28) ちなみに、チッタゴン市での小学校の教員の平均給与は

月6000tkである。

29) 野口道彦、1999参照

30) ネパールには30を越えるカーストがあり、清掃労働を担っているのは最下位の不可触カーストである。

31) 田中雅子、1997、1999

【参考文献】

- AKM Ahsan Ullah, Abdar Pahman and Munira Mursheed, 1999, *Poverty and Migration ; Slums of Dhaka City The Realities*, Elora Art Publicity
- Anwara Begum, 1999, *Destination Dhaka : Urban Migration: Expectations and Reality*, The University Press Limited, Dhaka
- Bangladesh Bureau of Statistics, 1998, *1997 Statistical Yearbook of Bangladesh*, 18th ed., Dhaka
- Bangladesh Bureau of Statistics, 1999, *Report of the Urban Poverty Monitoring Survey I*, Dhaka
- Bangladesh Bureau of Statistics, 2000, *Report of the Urban Poverty Monitoring Survey*, Dhaka
- Clarence Maloney, 1988, *Behavior and Poverty in Bangladesh*, The University Press Limited, Dhaka
- Nazem, Nurul Islam, 1998, ' *Changing Faces of Urban Areas in Bangladesh* ' in Abdul Bayes Anu Muhammad (ed.) *Bangladesh at 25 : an Analytical Discourse on Development*, The University Press Limited, Dhaka
- 佐藤彰男, 2001, 「バングラデシュにおける都市マイノリティーチッタゴン市のヒンドゥー清掃労働者コロニー調査から」(『大手前大学人文科学部論集』第1号)
- 佐野光彦, 2001, 「バングラデシュの都市中間層—その成長と政治的役割」(『都市研究』創刊号)
- 篠田隆, 1994, 「西部インドの尿尿処理とバンギー」(大野盛雄、小島麗逸編『アジア廁考』けい草書房、1994年)および篠田隆、1995年、前掲書、82頁
- 篠田隆, 1995 a, 『インドの清掃人カースト研究』春秋社
- 篠田隆, 1995 b, 「グジャラートの社会変化と後進階級」『フィールドからの現状報告』(押川文子編、叢書カースト制度と被差別民第5巻)、明石書店、1995年
- 高田峰夫, 1992, 「チッタゴンのスラムの人々—バングラデシュの“マチ”と“ムラ”の相関関係—」(『民族学研究』Vol.57, No.2)
- 高田峰夫, 1994, 「“メス”の生活—チッタゴンのスラムの人々(2)」(『広島修大論集』Vol.34, No.2)
- 高田峰夫, 1995, 「都市貧困者たちに見られる短期的人口移動—チッタゴンのスラムの人々(3)」(『広島修大論集』Vol.36, No.1)
- 田中雅子, 1997, 「ゴミ問題への挑戦—ネパール都市部の住民組織によるゴミ回収事業の事例から—」(『アジア女性研究』第6号)
- 田中雅子, 1999, 「民間組織によるごみ回収事業：ネパール・

- カトマンズ市を事例に、「『南アジア：構造・変動・ネットワーク』第1巻第4号、文部省科学研究費特定領域研究
- 野口道彦, 1999, 「バングラデシュにおける清掃人カーストと差別」(『同和問題研究』第21号)
- 延末謙一, 2000, 「バングラデシュ：中間階級体制の変容」(服部民夫・鳥居高・船津鶴代(他編)『アジア諸国における中間層論の現在』、日本貿易振興会アジア経済研究所
- 長田満江編著, 1995, 『バングラデシュ』、海外職業訓練協会
- 三宅博之, 1999, 「ダッカにおける下水処理問題」(H.G.パント他『アジアからのメッセージ…アジア、南アジア、そしてインド』嵯峨野書院
- 三宅博之, 1995, 「カルカッタとハウラーにおける清掃人の社会経済的状況」『フィールドからの現状報告』(押川文子編、叢書カースト制度と被差別民第5巻)、明石書店
- 村山真弓, 1994, 「ダッカの都市化と下水処理」大野盛雄、小島麗逸編『アジア叢考』けい草書房
- 村山真弓, 1995, 「イスラム社会の規範と工場労働」(『アジア研究ワールド・トレンド』No.6, アジア経済研究所)
- 村山真弓, 1997, 「女性の就労と社会関係…バングラデシュ縫製労働者の実態調査より」(押川文子編『南アジアの社会変動と女性』アジア経済研究所)
- 村山真弓, 1998, 「バングラデシュにおける援助の社会・政治的意味」(佐藤寛編『開発援助とバングラデシュ』アジア経済研究所、pp.5-28)。
- B・R・アンベードカル, 1994, 『カーストの絶滅』(山崎元一、吉村玲子訳、明石書店の「アンベードカル小伝」)